芭蕉翁春秋 三

太政官文庫
和書門
二六二九號
一〇四函
二架
三冊

内閣文庫
和書類
二六二九號
三冊
五八函
一八架

内閣文庫		
番號	和	11629
冊數		3(3)
函號	158	404

芭蕉翁春秋前編巻之三

江戸 天地庵 六世 葛飾素蓮 編

元禄元年戊辰 九月改元 芭蕉年四十五

【正月】歳旦吟 【紀行】霄の空の名残おしまむとて酒のみ夜ふかして元日寐忘たれハ二日にもぬかりはせじな花の春 【赤双紙】二

日にも此句ハ元日昼まで寝て餅くひそこなひしたりと前書ありて此句の時師の日頃類気つかひあるき趣向を得たり此てよそと二日よりといふをおもと侍るなりはいといひてハわすり平日にかはりて潤ふくやさしきとなり

○止鐸中風麦が家にて春興の吟を吐く【句集】風麦亭二句〽春立てまだ九日の野山かな〽山里ハ万歳おそし梅の花○按するに紀行にハ初春と題して〽春立ての句を出され今句集によるところとして風麦亭の吟とす

○止鐸中猿雖に一句を示さる【句集】對猿雖〽もろくの心柳にまかすべし

○止鐸中卓袋が家に至る【句集】卓袋亭〽月待や梅かたげ行小山伏

連衆三子の傳

風麦　小川氏通称詳ならず友田良品の妻梢風の父なり

○猿雖　内神氏通称惣七郎後に意専といふ西麓東麓二庵のあるじなり

○卓袋　通称貝増屋與兵衛伊陽門人の大指なり

○山家に雲丹の悪臭を厭ふの唫

句集　伊賀の山家に雲丹といふ物あり土底より堀出して薪ともす黒色にしてあやしき香あり

泊船集　伊賀の城下に雲丹といふものありけるくさゝき香なり
〽香に匂へ雲丹ほる岡の梅の花

○按するに諸刻抹藥記に伊賀国阿拝郡藏縄手村津領此辺邑々にてウタといふ者地より堀出せし黒土のやうなるものなり常々薪とせし上下の品ありて上ウタ價百錢に八十メ目位よりさんし下のウタを綿ウタといふて十メ目よりつきさ錢八十文くらゐなりとぞ

○止鐸中宗七宗與の二子を伴ひ新大佛寺の廢跡に遊ぶ

紀行　伊賀の国阿波の庄といふ所に俊乘上人の旧跡あり護峯山新大佛寺とやいふ名ぞのこりける千歳の形見となりて伽藍は破れて礎を残し坊舎は絶て田畑と名のかはり丈六の尊像は苔の緑に埋れて御首のみ現前とおがまれさせ給ふに聖人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ其代の名残うたがふ所なく泪こぼるゝばかりなり石の蓮臺獅子の座などは蓬葎の上に堆く双林の枯るゝ跡もまのあたりに覚えられけれ
〽丈六に陽炎高し　石の上

赤双紙　〽丈六に陽炎高し石の上は陽炎より傍造之石の上

此句當国大佛の句なり人々に吟し聞せ自も再吟ありて丈六の方に定まるなり○按するに史邦が小文庫集に出せる新大佛寺の記といふものは紀行の文と大異に同なり故に異文を後にしるし本文宗七宗與の二子を伴ふとは小文庫の記にしるさる

新大仏寺の記

伊賀の国阿波の庄に新大仏といふあり此所は奈良の都東大寺の聖俊乘上人の旧跡なり今年舊里に年をこえて旧友宗七宗無ひとりふたりさそひ物して彼の地に至る仁王門撞樓の跡は枯たるくさの底にかくれて松ものゝあとをと問ふも石居そのまゝ菫のみしてとにかく見えもかゝる景色に似たるも猶分ありて蓮臺獅子の座などはたゞ苔の跡を残せり御仏はこぼれける岩窟にたゝまれて霜にくち苔に埋れてはつかに見えさせ給ふに御首はいまだ全く恙もなく上人の御影をとゞめ置るゝ草堂のかたはらに安置したり誠に人の力を費やし上人の貴願いたつらならざる侍る事も涙もおちて談もなく敷なしく石臺をおしつきて

丈六にかげろふ高し　石の上

二月 日詳ならず伊勢に旅して白王太神宮に詣る 紀行 伊勢山田にて 〽何の木
の花とも知らず匂ひかな 士朗随筆 貞享五とせ如月の末伊勢に詣つ此御ほとり
の土をふむこと今度五たびに及べりぬ さらに年の一つもや老行まゝに
物かしこきおほせも尊さも猶思ひまさる心地して彼の西行のか
たじけなさにと読けむ涙の跡をしたひて扇打しきて砂にかしらか
たぶけて〽何の木の花とも 云々 ○按ずるに士朗が記に鶯亭夜話と注して
此文を出せり尤文章の華かた芭蕉に疑ひなし 但此文によれば伊勢に詣
ずる事五度なりとも芭蕉の参宮書に見えてうるは貞享元年秋八月一度
今年二度の外なし 其余の三度は木古仕官の頃なるべし然れば今考ふ所
なし 又此文に如月の末伊勢に詣せしとあれども十五日伊勢に涅槃像の
句ありて十七日神路山を出ると泊船集の詞書あれば士朗が記に始末の
誤ならん

○伊勢の神垣に尋ねて梅を見る 紀行 神垣の中に梅一木もなし いかに故ある
事にやと神司などに尋ね侍れば只何となくおのづから梅一木もなく
て子良の舘のうしろに一本侍るよしを語り伝ふ 〽御子良子の一本ゆ
かし梅の花 赤双紙 〽御子良子云 この句はことし伊勢にて老師梅の立を尋ね
し子良の舘のうしろに漸やく一本ふゆみて梅あり其外なかりしゆへ

社人の告けるに則句にして こあらましなりし師の云むかしより此所に
連俳の達人多く句をこころむに終に此梅の事をむらぶくと悦しく聞出る
なり風雅の心ぞけふより此事こそすてまる
を思ひ知れば安らかならぬこころなり
荒野 伊勢にて 〽神垣や思ひもかけず涅槃像

○十五日涅槃会を拝む 紀行

○日詳ならず山田にて俳諧興行 何の木のたよりもなし
芭蕉 益光 又玄 雲庵 勝延 涓里 以上六吟にて十二句なり 野仁 杜国の出名
席して二十句なり 正永出席して哥仙なる 俳諧集に出る

○此譯中龍尚舎に遇ふ 紀行 龍尚舎 句集 龍尚舎に逢ふ 有
職の人に侍れば 〽物の名を先問ふ荻の二葉哉

尚舎傳 尚舎は龍氏通称詳ならず伊勢の神職なり 尚舎とは号
なり 著述 古語拾遺抄 中臣祓直解抄 同追考等あり

○此譯中網代氏の雪堂に至て男何某に對す 紀行 網代民部雪堂に會 荒野
網代民部の息に逢て 〽梅の木に
なほやどり木や梅の花

網代弘氏の傳 滑稽傳 伊勢の足代弘氏は神職の人なり 談林の時上
手の名あり 〽時鳥きくは聞らん 時鳥寝入てとも妻さむ

名そ湊一百韵の附あり句作り宗因に似たりと云　○按ずるに愚いまだ
子息の名をしらず追て考ふべし

○止鐸中俳諧奥行　紙衣のぬるとも折らん雨の花　以上六吟まで哥仙なる一幅半に出づ　芭蕉　乙孝　一有　杜国　塵生　葛英

作者傳　一有　備前の産なり後大坂高麗橋に住して通称岡西惟中と
いふ医を業とし儒学俳諧に長じて尤能筆なり号を
一時軒といふ国花萬葉大坂の巻諸藝部の中儒学俳諧に惟中の名を注
せり天和年間妻につれて伊勢に遊て水郎子のまどゐを選し後伊
勢に行る時ふたゝび園女を妻とせて元禄十五年大坂に卒せし奇人談
に惟中古郷を出る頃園女ともに行て妻とするといへるは翁友故交
の偽説を其侭に写したり年六十取るふたゝび元禄七年十月廿六日の條に偽
説を辨じて合せ見るべし　又卒年も元禄五年とするは誤なり同十一年
の筆記を我友朱雀堂桂山か蔵せり
きし八十五年をもて正とすべし

○乙孝以下　姓氏詳ならず

○止鐸中園女　傳元禄七年に出せ　か家に至る

泊船集　伊勢園女亭にて
暖簾の奥ものゆかし北の梅

○十七日伊勢を出て古郷に皈る

泊船集　二月十七日神路山を出るとて西行の泪をしたひ増賀

の信をかなしむ

紀行　伊勢山田
□□よふかく如月のさむさかな

○廿一日伊賀より京の左柳　美濃の大垣に同名あり同人にや　小書を贈る

文書
今日そ江戸京より来てたちと斗申つく書簡を□
[illegible]

左柳まで　桃青

○止鐸中宗無　傳詳ならず　か家に至る

泊船集　宗無亭にて
花まやとふてへしめおりりや　廿日ほど

○古郷に草庵を営む【紀行】草庵会の芋植て門は葎の若葉かな ○按ずるに枯尾花に再び古郷に庵をかまふと元禄七年の条にいえるを此時はじめて庵をいとなみしか

【三月】日詳ならぬ旧主の別墅にて探丸に謁す【笈日記】同じ年の春まかり侍るに故主蝉吟公の庭前にて さまざまの事思ひ出す桜かな ○按ずるに句集には探丸子の君別墅の花見催させ給ひけるにまかりて古き事思ひ出侍ると云々 紀行には詞書なくして句のみをのせし又一書には芭蕉の句に探丸の脇句あり今是をとりやくす

【探丸傳】探丸は芭蕉の先主主計良忠の長子なり 名を猿蓑集に出せり 或書に良忠の弟とせるは誤なり委しくは正傳集に見ゆ

○十九日杜国を誘ふて大和に行く杜国戯にて萬菊丸 按ずるに 本朝文鑑に出せる庚午紀行に岩菊丸に作る但同書の注に萬菊を後に校許して岩菊丸とせると云々 と称して師の旅労を輔く【紀行】弥生なかば過る程そゞろに浮立心の花の我を道びく枝折となりて吉野の花に思ひ立むとするにかの伊良古崎にてちぎりおきし人の伊勢にて出迎ひ 按ずるに杜国伊勢に 俳諧あり萬菊と注せり 共に旅寐のあはれをも見且は我為に童子となりて道のたよりにならむと自萬菊丸と名をいふまことに童らしき名のさまいと興ありいでや門出のたはぶれ事せんと笠のうらに落書す ○乾坤無住同行二人 吉野にて桜見せうぞ檜木笠 芭蕉 吉野にて我も見せうぞ檜木笠 万菊丸【笈日記】貞享五年の春何月幾日芭蕉老人吉野山の花見むと伊賀の国より旅立申されし小尾の杜国は是に供せられて共に筆を取て笠のうらに狂せしとや

○旅中の嗟【紀行】旅の具多きは道のさはりなりと物みな払捨たれども夜の料にと紙衣ひとつ合羽やうの物硯筆紙薬等昼笥なむど物につゝみて後に背負たれば いとゞ脛弱く力なき身の跡ざまに引かるゝやうにて道なほ進まず只物うき事のみ多し【句集】大和行脚の時今井桜井など過て丹波市とかやいふ所にて日のくれかゝりけるに藤の覚束なく咲けるを見て 草臥て宿かる頃や藤の花

○旅中初瀬の蘭若に詣て【紀行】初瀬 春の夜や籠り人ゆかし堂の隅 芭蕉 足駄はく僧も見えたり花の雨 万菊丸

○旅中多武峯に詣てより龍門の瀑布を観むと臍峠に休ふ【紀行】臍峠

多武の峯より龍門にいたる道なり ○瀧門にて飛泉を見る二句
「雲雀より上に休らふ峠かな」
紀行 瀧門「龍門の花や上戸の土産に」 ○旅中華輿の五句 紀行「さくら云〻」
きん」「酒のみにかたらむかゝる瀧の華」

花見五句

櫻がりきどくや日〻に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならふ

花ざかり山は日ごろの朝ぼらけ

扇にて酒くむかげやちる櫻

しばらくは花の上なる月夜かな

○日詳ならず吉野山に登る 紀行 吉野の花に三日とゞまりて曙たそがれのけしきに向ひ有明の月の哀なるさまなど心にせまり胸にみちて或は摂政公のながめにうばゝれ西行の枝折にまよひ彼の貞室の是はくと打なぐりたるに我いはむ言葉もなくていたづらに口をとぢたるいと口をし思ひ立たる風流いかめしく侍れども爰に至りて無興の事なり

○苔清水を見る二句 紀行 苔清水「春雨の木下につたふ清水かな」

「凍とけて筆に汲干す清水かな」

○西河乃唫 紀行 西河「ほろほろと山吹ちるか瀧の音」

○日詳ならず吉野を下て葛城山の麓を過ぐ一言主の神を思ふ 先手後手 白兎園 大和国を行脚して葛城山の麓を通るに四方の花は盛にさきて峯々の霞に似たる有明の月もいとゞ衣るゝ花に彼の美目わるきといひし神の御かたちいかなる人の悪口にやあきなき名とはあふくぞ思ひうかぶひて「猶見たし花に明行く神の顔」

○按ずるに此詞を紀行に欄く猿蓑あらひに句集ともに大同小異の詞書あり翁さまざまに書ひて人にあたえられてなりと見ゆ

○旅中草尾邑に宿まで 荒野 大和国草尾村にて「花のかげ謡に似たる旅寝哉」

○按ずるに雑談集に謡とりの句をいふくだり江口の里にて「何やとまらば鹿身いかならむと時雨の」梅翁とかふ句をうけたのなりて其實を捨たる所肌骨にしみ侍りても再びは取付べき詞もなかりし所に大津にて「雪の日や船頭ども顔の色」其角とやらん次の年の春「花のかげ謡に似たる旅寝かな」芭蕉と聞えたりしかは章なりと誹諧の諷ひきとめ「さき更を思ひたちて云々」と見えたりとまた其角が雪の日の句は元禄元年冬其角上京の時の句なりとは芭蕉の花のかげの句に後れてあり されど古く書なしたるは強ておしえをいとむ為ならし 故に年次はいかやありけり

○旅中其角去来に書を贈る[句兄弟]其角「明星やさくらさだめぬ山かづら」と云句当座はさのみ興感もなかりしを芭蕉翁吉野山に遊る時山中の美景にけをされて古き哥共の信を感ぜし叙明星の山かたちに明残る景色此句のおもかげやさしきよし文通にかさねて申遣る[去来抄]「ねくらひハ何の山越えつ花盛」去来是ハ猿蓑二三年前の吟なり先師曰此句いまさらくいふべからず一両年を待べしと也其後杜国が徒と吉野行脚し給ひける道よりの文に武いはく吉野を花の山といひし武ハ是いくとせのまうと聞えし小町が申文ハ其角がさくら定めぬといひしは氣色をこらへまで吉野に発句もなかりき只おもく日ハ何の山越えつと日く吟し行となる○日詳ならん紀州高野山に登る[紀行]高野[士朗随筆]高野のおくに登れば霊場盛むなしくて法の燈消る時なく坊舎地をしめて仏閣つくりをなべく一印頓成の春の花ハ寂莫の霞乃空に匂ひておぼえ猿の声鳥の啼にも腸を破るばかりにて御廟を心しづかに拝み骨堂のかたはらに佇てはらく思ふやう此所ハ多くの人のかたみの集まる所にして我先祖の鬢髪をこしめ親しき名のかぎりも此内にありと思ひつかれず袂もしぼりかねてそぞろに落る涙をとゞめかねて「父母のしきりに恋し雉子の声」

○暮春和歌の浦を見る[紀行]和哥「行春にわかの浦にて追つきたり」○紀三井寺に至て旅情を誌さる[紀行]跪ハやぶれて西行にひとしく天竜の渡しを思ひ馬をかる時ハいきまきし聖の事心に浮ぶ山野海濵の美景に造化の功を見あるハ無依の道者の跡をしたひ風情の人の実をうかがふ猶栖をさりて器物の願ひなし空手なれバ途中の愁もなし寛歩駕にかえ晩食肉よりも甘しとまるべき道にかぎりなくたつべき朝に時なく只一日のねがひふたつのみ今宵よき宿からん草鞋のわが足によろしきを求めんとばかりハいさゝかの思ひなり時々氣を転じ日々に情をあらたむもしわづかに風雅ある人に出合たる喜びかぎりなし日頃ハ古めかしくかたくなゝりと悪み捨たる程の人も辺土の道づれにかたりあひはにふむぐらのうちにて見出したるなど瓦石の中に玉を拾ひ泥中に金を得たる心地して物にも書付人にもかたらんと思ふぞ又是旅のひとつなりかし○按ずるに紀行に紀三井寺と題して此辞あれども何かに付るや考る所なしされども是を捨るに忍びず本文に紀三井寺に至て旅情を誌さると題して此辞を加ふ後人考ふべし

[四月]朔日旅中の更衣[紀行]更衣「ひとつぬいで後に負ぬ衣がへ」○八日紀州よ

り再び大和に還て鐘を奈良に曳 紀行 灌佛の日は奈良にて
さしかしこ詣侍るに鹿の子
を産むを見て此日におゐておかしければ
〽灌仏の日に生れあふ鹿の子かな
○招提寺に詣て鑑真の像
を拝す 紀行 招提寺鑑真和尚来朝の時船中七十余度の難をしのぎたま
ひ御目のうち塩風吹入て終に御目盲させ給ふ尊像を拝
して 〽若葉して御目の雫ぬぐはばや
○日詳ならず旧友と南都に別る 紀行 旧友に奈良に
てわかるる 〽鹿の角先
一ふしのわかれかな
○日詳ならず郡山 此年間本多野州忠平侯の城下 に至り宇古
が家に止錫し別るる時に頭陀袋 奇人談に図あり今略す を与ふ 奇人談 頭陀袋傳譲遺
貞享年間蕉翁踏芳山之花道郡山を過て宇古の家に止る事十日ばかり
弟子杜国と三詠の俳諧あり其時翁別に臨て此一物を餞して宇古にあたふ
石室に秘せしといふ後故ありて正々處士の有となる僕
嘗て行て是を野火止の丘に摸を得たりといふ

宇古傳 原田宇古は和州郡山の重臣なりし少より頴悟人にすぐれたり
そもしめ戈丸に談し後変して蕉門に入る貞享中師翁吉

野に行くる時其亭に滞留して一日杜国と三吟の哥仙ありさればこの程は師
弟の親しみ厚く道を思ふの志深くして元禄の頃遂に蕉門俳諧別當
と称せし殊に達作りして廻文の句多し以上奇人談の要を採む○按ずる
に芭蕉在世の集に宇古の名見えず死後門人の集に宇古の名稀に
見えたり師弟としても厚きこと門人なりしや
今知る所なければこゝには志てしるく奇人談の説に随ふ

○日詳ならず摂陽に至り何某が家に舎る 紀行 大坂にてある人
の許にて 〽杜若かたるも
旅のひとつ哉
○旅中山崎にて宗鑑の旧跡を見る 泊船集 句集 山崎宗鑑旧跡
山崎宗鑑屋敷
て近衛殿の宗鑑が姿を見給ひて杜若と詠じたまひしを
思ひ出て心の内より 〽有がたき姿おがまむかきつばた
○日詳ならず須
磨の浦に遊ぶ 紀行 卯月の中頃の空もおぼろに残りてはかなき短夜
の月もいとゞ艶なるに山は若葉にくろみかゝりて郭公鳴
出づべきしのゝめも海の方よりしらみそめたるに上野とおぼしき所は
麦の穂波あからみあひて漁人の軒ちかき芥子の花のたえだえに見渡さる
〽海士の顔先見らるるや芥子の花 東須磨西須磨浜須磨と
三所にわかれてあながちに何わざするとも見えず藻しほたれつつなど

哥にも聞え侍るも今はかゝる業するなども見えず すゞごといふ魚を網して真砂の上に乾ちらしけるを烏の飛来りてつかみさる 是をにくみて弓をもておどすぞ海士の業とも見えず 若古戦場の名残をとゞめてかゝる事をなすにやといとゞ罪ふかく 猶むかしの恋しきまゝにてつかひの峯に登らんとする 導する子のくるしがりてとかくいひまぎらはすをさまざまにすかして 麓の茶店にて物くらはすべきなど言てわりなき体に見えたり 彼は十六といひけん里の童子よりは四つばかりも弟なるべきを数百丈の先達として羊腸険岨の岩根を這ひ登れば すべり落ぬべき事あまたゝびなりけるを つゝじ根笹にとりつき息をきらし汗をひたして漸雲門に入るこそ心もとなき導師のちからなりけらし

須磨の海士の矢先に鳴か郭公

ほとゝぎす消行方や島一つ

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石

○日詳ならず 播州明石に泊る 紀行 明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや 此浦の実は秋をむねとするなるべし かなしさ淋しさいはむかたなく 秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出つべきものをと思ふぞ 我心匠の拙きをしらぬに似たり 淡路島手にとるやうに見えて須磨明石の海左右にわかる 呉楚東南の詠もかゝる所にや 物しれる人の見侍らばさまざまの境にも思ひなぞらふるべし 又後の方に山を隔て田井の畑といふ所 松風村雨の古郷といへり 尾上つゞき丹波路へ通ふ道あり 鉢伏のぞき逆落しなどおそろしき名のみ残て 鐘掛松より見おろすに一の谷内裏やしき目の下に見ゆ 其代のみだれ其時のさわぎさながら心にうかび俤につどひて 二位の尼君皇子を抱たてまつり 女院の御裳に御足もたれ船やかたにまろび入らせ給ふ御ありさま 内侍女嬬曹子のたぐひさまざまの御調度持あつかひ 琵琶琴なんど褥布団にくるみて舟中に投いれ 供御はこぼれてうろくづの餌となり 櫛笥はみだれて海士の捨草となりつゝ 千歳のかなしび此浦にとゞまり素波の音にさへ愁多く侍るなり ○按ずるに芭蕉貞享四年冬十月に紀行を起し今度にいたる其間七ケ月なり 人呼て卯辰紀行といひ或は吉野紀行ともいふ 後人のよぶ所にして出る所なし 又宝永六年春正月大津の乙州此紀行を板行して笈の小文と題号す 又支考が本朝文鑑に出せるを庚午紀行とす 此二名は甚しき偽なり 彼の笈の小文とは翁が自選の俳集の名なりしといへり 此選集を果さ

にして翁の卒せらるよし 去来抄に委し 且題号は太刀といふ謡曲より芭
蕉の考へおきくるよし 黒双紙に見えて紀行の表題に用ゐさる事何きらかなり
又文鑑の庚午紀行も庚午の支干は元禄三年なりされと貞享四年
丁卯元禄元年戊辰の二年に渡まる紀行に名つけむもいふかし

○廿二日難波より川舟に乗て大津に至て錫を止む 〔句集〕木曽路の旅思ひ
立て大津にこもりて勢田の螢を見て〽此頃なる田毎の月にくらへ見むと

〔芭蕉文書〕三月十九日伊賀の上野を出て三十四日道の程百三十里此内船十
三里駕四十里歩行路七十七里なり ○桜さかりに三月十九日より三十四日は四月
廿二日に當る又里数を考ふに伊勢より大和以下近江の吟行に船路十三里
とは淀の船路と志らるる廿
二日浪華より大津に至るとぞ ○廿五日伊賀の宗七に書を贈る

文書

三月十九日伊賀上野を出て三十四日道程百三十里此内船十三里駕
籠四十里歩行路七十七里雨にあふ事十四日

風の物七　説門　西行　陸路　峠　布引　須磨

古塚十三　蓮好塚　一谷塚　乙女塚　忠度塚　清盛石塔　敦盛塚

松風村雨塚　通盛塚　鉢伏　宗国　経正塚　河原太郎次郎塚

良将楠塚　能因法師塚　人丸塚

峠六ツ　理門　鉢伏　鉄拐　権尾峠　ツカリ峠　当麻峠

坂七ツ　轍坂　西河上ちいさき坂　しいのき坂　高野坂　かご坂　不動坂

生田小野坂

山峯六　国見山　お福嶽　高野山　たいまの峰　鶴尾の山　金剛の山

拄杖橋の数川の数なとはおもふさまにもあらす書もらし申候

卯月廿五日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　桃青拝

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗七

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　松吉

〔五月〕此驛中湖橋を望む 〔荒野〕〽五月雨にかくれぬものや瀬田の橋 〔雑談集〕
五月雨にかくれぬあらし 此橋の名大かたくの名哥
おほくよひて矢はきの橋とも中へきさまや長橋の天にかかる勢田一橋にかぎるへ
このふえと難去しよし京大津より聞え侍るに去来か〽湖の水まさりけり
五月雨といへるままに湖鏡一面にくもりて水接天ところの八景をことに
折るに此一橋を見付る時といひ所といひ一句に得たる景物の動きなる
場をいりて及ぬこきや文章の見ものに
ものいふにといへる聲者のたくひなるへし

○日詳ならす大津を發
て濃の大垣に至る閑の素牛客舎を訪ふ 〔泊船集〕閑の素牛の
ぬし大垣の旅店にて

正風三十六俳仙像　有像　序五

訪ひける彼の藤代ミさかといふ所にて花ハ宗祇のむかしに匂ひて「藤の實ハ俳諧にきかむ花の後 [本朝文鑑] 貧讃 惟然 今ハ十とせ余り先なれば芭蕉翁の美濃行脚に「見きるやに茄子ともちぎる軒の畑」と招隠のこゝろを申たりしハしけるに「其葉を笠に 謝ば記ニハ笠ヲ坊ぬと作れり おりむ夕顔」と其文の四答なりけるおもしろき画に書てたびけるが今さら草庵のかざりとなして猶さく茄子夕顔にはなちひて其貧楽に何ぞふなりける 略下 ○按するに貧讃ニ見えしなすやに茄子と云ことを申したりしなる云ことを何を翁ハ翁の大垣に旅泊せし時素牛が瓢より文書を贈りしなり其時の返辞に夕顔の瓢藤の實の句を與へ給ひつれど泊船集句集とも藤の實を秋季とせて藤の實ハ素より難なるを花の後と定られて翁の其季に用ひられ深く称讃せし

素牛傳

素牛ハ濃州関の人なり氏を廣瀬と称す元禄三四年の頃名をあらためて惟然といふ鳥落人又弁慶庵とも号せし彼千金の家に生れし文を香油の光にかけて中頃禅と俳とを貪に学て功を蛍雪の影に修して山川人跡の至る所東西南北して師風を弘め人とおもひを利して自終る其言行奇人傳及ひ奇人談に出たり愚も又同時の評を注して其俳風を志らしむ [本朝文鑑] 貧讃讃 選考 此作者ハ蕉門に名ありて其名しかりハ素牛といひ其後ハ惟然と云ふ鳥落人ハ彼か標号なりとぞむかしハ千金の家に生れて始ハ文字の室也

に頭をかくしける後よハ禅法の室に眠をさらすに至りて妻子をたちささえなから希有のおもこよハ何けりしかくもハ酒色の遊ひにもおさかれ又博奕のたはぶれにもなさすして千金の所帯ハ何になり行ぬらむさりとて竃居士が舟に乗りて西の海へ捨てる沙汰も聞れと其頃の人のふしぎなる中に何る夜木曽寺の雑奥寐するとて木枕を帯りてありしともをたまたま見てさるかむ鉢ひらきの境界なからも天窓の栄耀の残りたまへハ物ハ彼の千金ハ何の天窓よりぞはなるゝやと故翁もたはふれしか其後ハすまし貧の名を得て心さてくしの浦々と巡り思ひ越路の山々をかけまはりて夷が千島の果までに薬の杖に小豆の衣をこぼかつき八草の枕に王孫の袂をしほりて奈古曽の関守も彼の素牛なりと知り冨士川の船頭も其惟然なりとしるあつめし仰から此御坊ありて蕉門の道ハ踏分たりといふべし [俳諧雑集] 許六曰惟然坊といふ者一派の俳諧を弘むるよハ益ありといへとも抑て衆口を引の罪のまぬかれならむ作口そのミ唱へ出して一生真の俳諧をいふもの一句もなし 蕉門の内に入て世上の人を迷はせし大賊なり故に近年もつての外の集をもつてあ世上に恥をさらすも此惟然坊が罪なり口もさき世の便りとをておもへハ是非なし ○去来曰雅兄惟然が評箸節を合するか如し其内一生真の俳諧一句もなしといへるハ過ぎたりといふ又大賊といひしか

らむ彼ハ自らよくひ志ふれして人にそのまゝ是を大害とも又賊の字ハ雅兄
いきろふりの甚しきなれむ惟然坊か俳諧する彼蕉門に入る事ひさしと云
のさとも先師に昵近せる事稀なり故に去る戌の年頃より坊か俳諧世人
是をとられ然とも先師遷化の前京師湖南伊賀難波等に随身して
游吟せし先師彼か性素にして深く風雅に志さし能く貧賤にたえたる
をいとまし俳諧に導すたまふ事切なり故に彼か口質の得たるところ
にこもふひて一ツの好句ある時ハ坊ハ作者なり二三子の評いかにと何て
人々の屈罪してあつからむやと感賞甚し坊も又自心気進むて
俳諧日頃に十倍せらるゝ先師のわしよえにかつい八俳諧吟伸のいくくの楽
ふかく是を紙に写せし時ハ反故に同し或ハ當時の俳諧ハ工夫を日頃よ積
て句にのそむて只気先を以て吐出すへし或ハ俳諧ハ無分別なるに高ミ
いり如此の詰ふかに故いつての雑談なり坊かよろひを是にとるか又先
師の一解につきて感賞し給ふ事をきふれ蕉門の俳諧かくの如くと
こゝろふさえうてふつふ迷ひて終に全体を見れかえつて同門高名の
俳諧をもて或ハねそし或ハ重しとせし如此の癖をもて人に示さむに豈害ふ
からむや吊推察をもて坊を訛評を極めて過當なり然とも坊か一言をよ
く證とせて坊か詰に日頃日師に昵近して略能旨を得たり秀作ハいかにく
といへとも句の善悪ころころ定て人許をまちぬ亦の會に風国よいふ句

ハ出る侭そよしとせて是を斧とせて正きハかえつて低しふおもれ皆是先
師の賞詞と俳談とにまよえり坊ハ迷えりといふへしこゝろつふ欺きて人を
たふらかれ者よハあらん坊四方に行脚せりといえとも其徒集をえらむ
者少し南都に一集あり選者を忘れたしめ坊助をなす志つまし共
坊か心に叶いれ半ふりしてのらきぬと聞ぬ亦豊後に一集あり是ハ坊か手
筋なり志かさとも此集坊か教示によりて先草稿し後坊に聞し加入せる
と聞えたり其外坊か集なし○許六曰惟然坊か評なるをもて汝たふ
し先生の論神の如し一生真の俳諧なしとハ吊か過論か孫々たる石の中
にハ金よ似たる者もいかむ「世の中を這入かねてや蛇の穴」とハをこし衣
なる所もあり此坊素牛といえる時「藤の實」といふ集をあつめ其時ハさ
したる事もなきやくに思ひ侍れとも此頃いかよりに集ともの拙きを
見て此集をとりて出し見るに頃日の集に似たる物よもあられ是ハ師在
世し給ふ光りなり此藤の實もそゝり晒堂か後見と見えて奥の俳諧ハ
珎碩口なり（晒堂珎碩と八間人なり）丈草の手傳も見えたり正秀の序文ハ丈草の口
なり師の手傳とハ見えぬ［去来抄］「梅の花赤いハ〳〵赤いのに」惟然坊か今の
風大かた是等の類なり発句にハあられ先師遷化の歳甚惟然を遠ざけ給
ふに其得たる口質の処よりきくめて「磯際にさふり〳〵と浪打て」「杉の木
にすう〳〵風の吹わたる」なとやふを賞し給ふ又俳諧ハ気先にて無分

別に作をしとのへまひ又其後風体かろみにおもむくのさかひにいたる御
迷ひ我得手る引のみて自の集の哥仙に侍る妻呼ぶ雉子何ぐるが如くの雪の句
なとに先師評し給えり句勢句姿なとくいふ事の物語とも八皆々忘師されける
ると見えたり〔文草文台〕惟然諸国奉加帳の力かり渡り紙衣襟巻十徳姿ナト
餅たくさんを道ゆき出ける体よと見えし又いかなる心やありけん風羅念
仏といふ事を何ぞ立木奥に似くる鳴物にあしらへ則風羅器と名付て
「古池よ〳〵〳〵　かはつ飛こむ水の音ナムアミダブツ　ナムアミダ
「いりめしこさ音やゆるぎの檜木笠雪の仏やふみて頭巾し
なむとかやうに唱哥九つあつて九品蓮台にかたどりける此ひ西国がたへ
まで是を唱しうハ米五升六升つゝ志さしたとの廣言古翁墓の下にていかゞ
う見らるらん宗早一言え出しかし十二月十二日草庵一膳所無例の一例
集に節彼の念仏を手向とて皆々一所望残多ひ事ハ風羅か器らないと
の容体是そのへハいかなる笠の岩屋の無言上人もかこハ合ひやましきと
何さ斗てし何さ斗ともなみ〳〵たらぬ仕合チヨツト聞て　モライ一ロトーと書
付る〔隨斎諧話〕惟然ハ法師なりし八井ネムと呉音にて称へしと思ひしに
漢音にて井ゼムと呼しと見えたり伊丹の鬼貫か家を尋し時「秋そさ
ひら鬼貫の夕辺やなと即吟に戯れしに鬼貫とりあへぬへいさん
あるやて時ハ世の夏と勝して戯かひし夏七車に見えたり

〇五日岐阜に至て僧巳白が秋芳軒に止鐸せ〔荒野〕そしめて草室を訪ふ十
る頃「あくらくとのそく菖蒲の軒端かな」秋芳〔泊船集〕来門已白亭に日頃あ
りて「全くりきん藥の杖おふる日かな」〇按するに荒野集の秋芳か詞書
と泊船集の公羽か詞書と照し合するに五月四五日の頃より初秋迄
凡六十日余巳白亭を何りしとして美濃に行脚何りしるべし

〔巳白傳〕巳白ハ美濃の岐阜に住せる僧なり号を秋芳軒と呼ふ或ハ
秋芳或ハ巳白と名とも通しもちい〔菖松原〕一冊ハ是そ蕉翁ハ
何せんたくハえず」かゝる深長の一所ハ久しくこもるべき地に何ふ今ハ
其人も「薄くしと底のやるころや三日の月」といへる処にて何そふらむ

〇止鐸中賀島氏の楼に登て十八楼の記を作る　十八楼の記風俗文選に出

十八楼記
美濃の国ながら川にのぞみて水楼ありあるじを賀島氏といふ稲葉
山うしろに高く乱山左右にかさなりて近からず遠からず田中の寺
ハ杉の一むらにかくれて岸に添ふ民家ハ竹のかこみのみどりも深し曝布
所々に引はえて右に渡し舟浮ぶ里人行かひあはれく漁村軒をあらそへて網
をひき釣をたるゝおのがさま〳〵も只此楼をもてなすに似たり

暮かぬる夏の日も忘るゝばかり入日影も月にかはりて波にむすぼほるゝ篝火のかげもやゝちかく高欄のもとに鵜飼するなど誠にめざましき見ものなりけらし彼の瀟湘の八つのながめ西湖の十の境も涼風一味のうちに思ひたゆるにや此楼に名をいはゞ十八楼ともいはまほしきかな

此あたり目に見ゆるものは皆涼し

○止鐸中岐阜川の鵜飼を遊観して 〔荒野〕 岐阜にて

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉

〔泊船集〕 名にしおへる鵜飼といふものを見侍らんとて暮掛ていざなひ申されし人々稲葉の木影に席をまうけ盃を挙てつくれなくひゐるながらの川の鮎鱠 〔黒双紙〕 師一年岐阜鵜飼見の時鵜飼一人に十二羽づゝ舟に篝して其先にて是をさばき十二羽の縄たて横にもちさばきてさしてもつれにさま夏くやさしく是をなす鵜飼に此夏を尋ね侍れハ先もちさばきやう捌てなまなかにくなしくもつらしくもちゐてするもの獨捌くるといへり萬に此心ハあるべしとなり

〔六月〕 日詳ならず 去来が妹千子が死を悼て書を贈る 〔猿蓑〕 千子が身まかりけると聞て美濃国より去来がもとへ申遣し侍りける

なき人の小袖も今や土用干 〔去来抄〕 なき人の小袖も云々先師の句ハ千子が妹の身まかりける頃美濃国より贈り給ふ句なり其心をいふなかれ只中に来まとい以上要を採む○因にいふ一書に千子ハ向井元升が子元桂が妹去来の姪なりと書しハ誤なり去来抄續虚栗ともに去来が妹とし又同集に出る千子が句の詞書にも兄去来に供して云々とあり

○止鐸中己白稲葉山に公羽を誘ふ 〔泊船集〕 美濃より入て 〔句集〕 秋芳軒己白が招に應て稲葉山の松の下すゞしくして長途の愁をなぐさむほどに

山かげや身を養はむ瓜畠

○止鐸中落梧が一子の幼死を悼 〔句集〕 落梧のぬし幼き者をなくしけるを悼て

もろき人にたとへむ花も夏野哉

落梧傳

落梧姓氏詳ならず濃州岐阜の人なり元禄三四年の頃死せ 〔行状記〕 風雅に志厚き亡者乃至落梧云々 〔風俗文選〕 招魂賦 鼓き岐山の落梧としてに明暮の心ぞつかましく近きも十とせをかへりの風雅の交にむつまじくそうつくし心あるは一所ありて相手にハいとこよなし

〔七月〕 日詳ならず 美濃を發て尾州に止鐸し 鳴海の知足が

に俳諧興行 そら秋や海より青田も一ととろ 芭蕉 重辰 知足 如風 安信 自笑 以上六吟にて十七句成り牛歩出席して哥仙なる千鳥掛集に哥仙あり是を略されと注して表六句を出し 幽蘭集に発句へ初秋ハ海やら田やらみどり哉」とありて哥仙の全巻を出さる

○此繹中知足が家弟安信 通称金右衛門 が新宅賀會 能き家やすゞめよろこぶ背戸の粟 芭蕉 知足 安信 以上三吟にて表六句なる発句の詞書に知足の弟金右エ門新宅賀會云々 以上千鳥掛集に出たり

○十一日知足が家にて青瓢の句を詮さて

千鳥掛集 初秋中の一日此所にありて〽夕顔や秋ハいろいろの瓢かな ○按するに此吟を荒野集に仲夏の部に出したるより説々ありて秋甚定かならねとさもとも千鳥掛集に如此詞書あるうへハ強て辯を加ふるにおよばじさて千鳥掛集ハ公羽が卒後の集なれとも此句に此詞書ありて集に益なく巻の荘厳なるならさまハ知足の徒偽作をなせしとその謂なし思ふに公羽初秋此所にありて青瓢の題詠なるべし 其後再按して夕顔の吟として荷兮に與て荒野集にハいれしめしか又荒野を按ずるに彼集にも杜撰ありて證となしがたき事多し 守武が辞世の吟ハ其角が雑談集に難じて其非なるをいへり又年中行事十二句の中に端午と題して〽面やさて葵

つけたる髪かもし」といふ句を出されり是ハ撰者荷兮が句にしてかくの如くの誤をなすや加茂葵祭ハ四月中の酉日なり集中かゝる誤何事ハ公羽が青瓢の句も夕顔の句と思ひ誤りて加へたるにもしるへからず又公羽在世の集といへとも荒野になきにハ公羽の句を誤れる事多し然れハ芭蕉の深く本意さけるよし黒双紙に見えたり

○廿日尾城の長虹亭にて俳諧興行 粟稗のとぼしくもあらず草の庵 芭蕉 一井 長虹 竹葉 荷兮 一井 越人 胡及 鼠弾 以上七吟にて哥仙なる端書に云七月廿日於竹葉軒長虹興行云々 発句の詞書にいふ秋の竹葉軒といふ庵を尋て云々秋日集句集共に見たり

作者傳

長虹 姓氏詳ならず号を竹葉軒といふ

○鼠弾 秋名詳ならず

同門評 鼠弾ハ野にハ多く出られて後沙汰もなし 此僧血脈花實ハあらねと折ふしの発句に〽行燈に飯食ふすゝろや雉子の声」といふ旅行の句あり花實なき人にもあらねど志あれども風雅ハいつも世用にもって三つの風雅をとられ先ゐまてと本意とする人なり仮令ハ親くくちありたる屋鋪をとられてたくはへてつる宝なげきてハ宿賃をむさぼりて己ハ裏屋に引こもり世を渡る人に似たりとしこのみさきに芭習ひに行給ふ程に思ひ給て三つの風雅をもって七つの世用をつとめし疑なし

○一井 以下傳詳ならず

正風三十六俳仙像 百像 第六

八月　止鐸中野水の洛に行を送る　句集　野水が旅行をおくりて
見おくりのうしろや淋し秋の夕

○按するに荒野に越人旅立けるよし聞て京より遣せしと野水が詞書あれハ今野水が旅行を京におくるとせし　○十一日越人を誘ふて尾城を発し信州更級に趣く門人是を送る

荒野　釣雪一井野水舟泉鼠弾荷兮の餞別の詮あり今是を略せ

翁更級の旅記を作る　更級姨捨月の辨

十一日美濃の国を発し云々とあるに今十一日尾陽を立とハ當らさるに似たれとも更級紀行にハ木曽の山道さかしきをおもひしと荷兮が僕をしておくらしむとあり然れハ尾城を立て後に再ひ鐸をとゞむるにさもあれハ美濃ハ大山鵜沼の堺ひなるへし故に今十一日とせ

更級記行　附録小文

更級の里姨捨山の月見む事しきりにすゝむる秋風の心に吹さわきて共に風雲の情をくるハせる者又ひとり越人といふ木曽路ハ山ふかく道さかしく旅寐の事も心もとなしと荷兮子が奴僕をして送らすおのの心さし尽すといへとも駅旅の事心得ぬさまにて共におほつかなく物事のしとろに跡先なるもなかなかにをかしき事のミ多し何々と不可言て六十そうりの道心の僧おもしろけもなくさけもあらす只むつ/\としたるか腰たわむまて物おひ息ハせはしく足ハきさむやうにあゆミ来れるを伴ひける人のあハれかりておのおの肩にかけたる物とも彼の僧の負たる物とひとつにからミて馬に付て我を其上にのせて高山奇峯頭の上におほひ重りて左りハ大河流れ岸下の千尋の思ひをなし尺地も平かならさるに鞍の上しつかならす只あやうき煩のミやむ時なし桟橋寝覚なと過て猿かはせたち峠なとハ四十八曲りとかや九折重りて雲路にたとる心地せらる歩行より行ものさへ眼くるめき魂しゐしほミて足さたまらさりけるに彼の連たる奴僕いともおそるゝ気色見えす馬の上にて只眠りにねふりて落ぬへき事あまた跡より見あけてあやうき事限りなし仏の御心にて衆生の浮世を見給ふもかゝる事にやと無常迅速のいそかハしさも我身にかへり見られて阿波の鳴門ハ波風もなかりける夜ハ草の枕を求て昼のうち思ひまうけける景色むすひ捨たる発句なと矢立取出て燈の下に目を閉て頭たゝき伏せハ彼の道心の坊旅情の心うくて物思ひまうけるやと推量し我をなくさめむとす若き時おかミめくりける地あミたの尊き数を尽しおのかあやしと思ひし事とも咄しつゝけるそ風情のさわりとなりて何を云ひ出る事もなかりけるに月影の壁の破れより木の間隠れにさし入て

引板の音鹿追ふ声所々に聞えけるやてはかなしき秋の心哀に尽せず
いざや月のなぐさめに酒ふるまはむといへバ盃持出たりよのつねに一
めぐりもおほきに見えてふつゝかなる蒔画をしたり都の人ハかゝる物ハ
風情なしとて手にもふれざりけるに思ひもかけぬ興に入て瑇瑁玉
卮の心地せらるも所がらなり
あの中に蒔画かきたし宿の月

○十五日更級に遊て姨捨の月の弁を作る　月の弁史邦が小文庫に見えたり

更級姨捨月の弁
あるいハしらゝ吹上ときくにうちさそハれてことし姨捨の月見む事
しきりなりけれバ八月十一日みのゝ国をたち道遠く日数すくなけれバ
夜に出て暮に草枕す思ふにたがハず其夜さらしなの里にいたる山ハ
八幡といふ里より一里ばかり南に西南に横をりふして冷じう高くもあらず
かどかどしき岩なども見えず只あはれふかき山の姿なりなぐさめかね
しといひけむもことわりしられてそゞろに悲しきに何ゆゑにか老たる
人を捨たらむと思ふにいとゞ涙もおちそひけれバ
おもかげや姥
ひとりなく月の友

○十六日善光寺に詣て　更級紀行 善光寺ハ 月影や四門四宗も只ひとつ　○再び
更級の里に舎りて既望の吟を吐く　紀行 十六夜もまださらしなの郡かな　○按ずるに尾州名古屋
より信州更級に至るにハ木曽街道を美濃より信州洗馬宿に至り同驛
より左に入て松本街道を十驛稲荷山より右に入る則八幡村なり同所よ
り善光寺へハ稲荷山丹波島とへて陽つのきさ是ハ此十六夜の一句八十五日に更
級郡姨捨山の月をながめ十六日に水間郡の善光寺を拜し同日又更級
郡に立皈て旅泊なしたる故なりん更級水間の
郡界ハ丹波島と善光寺との間千隈川を界とせ
○旅中桟の吟　紀行 桟や命をからむ蔦かつら　芭蕉
霧晴て桟ハ目もふさがれず　越人
○旅中浅間の吟　紀行 吹飛す石ハ浅間の野分かな
○此旅間荷兮に木曽の菓を贈る　紀行 木曽の橡浮世の人の土産かな　○按ずるに荒野に
木曽の月見て来る人の土産にとて橡の實ひとつおくらる年の暮まで
しふハいかさまやきん云こと荷兮の詞書に見ゆ翁の句と合せ思ふに翁
の雅志のなすところにして　○日詳ならず　越人　越人十月旧里に皈る其間
越人の土産ハなからん　其嵐をそへしめ多く江戸

小吟會あり

を伴ふて江戸深川に皈る素堂歸庵の賀詞を贈る

芭蕉翁庵にかへらんとよろこびてよめる詞

むかし行脚のころいろ花に茶の羽折見むと吟して待て侍りし其羽折身にそひて五十三驛ふるびし往来さらぬ野山をもはけ尽して風にたへ日にさらされしやうに離婁か明もいろをうつすよしなく龍田姫も染かへ支度かならへし是猶ふるさとの錦にもなるへきなるとおかしくもあはれにも侍る誰かいふ素堂素ならん目くらし茶の羽折といふよくそて名付たる其詞にかけてまた申侍

茶の羽織思えはぬしに秋もなし　山素堂

○日詳ならず草庵にて俳諧成る

鳫か音もしほりにか聞とかよひすや　越人　芭蕉　以上両吟にて哥仙なる荒野に出たり

○日詳ならず苔翠か家にて俳諧成る

月出て行燈けさむ座鋪哉(?)　友古　夕菊　泥芹　依々　苔翠　芭蕉　以上七吟にて哥仙一折成る端書にふふ(?)東武苔翠亭にて　柱暦集に出たり

○日詳ならず俳諧興行

白菊はたをりや鶏頭(?)　杉風　越人　翁　苔翠　友五　夕菊　依々　泥芹　以上八吟にて哥仙一折なる梅人梓行の鹿島紀行に附録せり

○其角に更級の月興三句を示て評を望む

【雑談集】翁北国行脚の頃更級の三句を書留いたりとや申されけし件は誠にへ侍るや姨捨とりかく月の友と云句とならくて定かたしあるあり一句人目には立す侍れとも其夜の月の天心に至る所人の知る処稀なりと申されけり

【九月】十日素堂か菊花の莚に會せし【笈日記】素堂亭　十日の菊云々

蓮池の主翁ならて菊を愛せしそのふは竜山の宴をもわかさりふは其酒の何まりをもとめて狂吟の戯れをなすなと思ふ明年誰かれこそかふらむ支を

いさよひのいつれか今朝に残る菊　芭蕉
残菊はまことの老の終りかな　路通
さくともさのみいそかし宿の菊　越人
きのふより朝つかたし菊そえけ(?)　友五
隠れ家やよめなの中に残る菊　嵐雪
此客を十日のきくの亭主あり　其角
酒折のまろくの菊とうくわんとや(?)　素堂

夜は八九の夜日八十日といへる事をふりきさ連哥師のいひつたへしを此かりにこゝろを挿して侍る

○十三日芭蕉庵に會て月を賞す

[笈日記] 十三夜云々　芭蕉庵

芭蕉庵に月をまでて何をひて只月をぶ越の人あつまりしの僧何りけるを浮草のあらぬ水に似つる如し何事も浮雲流水の身として石山のほとりにさすらひ更級の月にうかれさて庵にかへるいまさへ日も何ぶ菊に月にもわざさへ吟身いそがしきに花月も此ふる暇何かし思ふに今宵を賞する事こと年ハ何ふりての悔あればハある中華の詩人忘れてゐるに似たりまして冬ふぶきにきく我国の風月にこめけるべし

もろこしに富士あらばけふの月見せよ　素堂

影ふくく夜たゞぬかと照る月見かな　杉風

後の月たとへハ宇治の巻ならむ　越人

何うつさん闇もあらうや十三夜　友五

行さきざく丈やるそての月見かな　岱水

後の月名にも我名ハ似ざりけり　路通

我身にハ木曾ぬ似たる月見かな　僧宗波

十三夜すべく霄かなかふ宗中から　石菊

木曾の痩もまだなほらぬに後の月　芭蕉

仲秋の月はさらしなの里姨捨山になぐさめかねて猶あはれさの目にもはなれずながら長月十三夜になりぬ今宵は宇多のみかどはじめて詔をもて世に名月とみはやし後の月あるは二夜の月などいふめる是才士文人の風雅を加ふるなるべし閑人のもてあそぶべきものといひ且は山野の旅寝も忘れがたうて人々を招き瓢を叩き峰のさゝぐりを白鴉と誇る隣の家の素翁丈山老人の一輪をおくる二分狂といふ唐哥は此夜折にふれたりとたづさへ来れるを壁の上に掛て草の庵のもてなしとす狂客なにがししらら吹上とかたりけん出けふ八月も一際くまやみて中々ゆかしきながめならん

貞享五戊辰菊月中旬

物しるよほかはつひのなし　後の月　蚊足書

[十月] 日詳ならず大通庵道圓居士追福俳諧興行

其かたち見ばや枯木の杖の長　芭蕉　石菊

苔翠　友五　素堂　路通　曾良　以上七吟にて哥仙成る

[小文庫] 大通庵の主道圓居士芳名をきく事ひさしまみえむ事を契りて住のみそ

の日ゑとりくりけり初冬一夜の霜と降ぬりけれハあとゝむとめくりよりそまよりとふ
を聞て其ありさま見しや枯木の杖の形〇桜まさるに愚ハ道円の真路と知
まよりいで此俳諧を定めあるしさ迄とも路通か江戸に下りし真此時の外哥
是ぶ十せハ假小今年とも猶彼か連る巻皆下に加ふ

〇月日詳ならぬ俳諧並行　生ならぬむとらは　芭蕉岱水両吟にて十二句に
氷るなよこなかの止ぬ後に杉風岱水両吟にて一折なる木曽の谷
集に
出せし〇日詳ならぬ俳諧並行　雪の夜ハ竹馬の　路通　宗波　女丑　芭蕉　岱水
何くれ我連よ　曽良　夕菊　以上七吟にて哥仙成る

〇日詳ならぬ俳諧並行　雪毎にうつりけり　岱水　路通　八翁　友丑　曽良　宗波
ながらむ住居哉　嵐竹　雨桐　夕菊　緑絲　以上十吟にて哥仙成る

十二月日詳ならぬ俳諧並行　こゝふわかる二見の　芭蕉　岱水　曽良　嵐竹
七五三と年のくれ　蒼波　路通　友丑　泥芥　夕菊　以上九吟にて
三十句に止む〇愚云前の哥仙三巻ハ出所注さすりハ家の枝華録によ
る此哥仙并に雪の夜ハ竹馬の巻とも共ニ幽蘭集にも見えたり

芭蕉翁春秋稿編巻之三終

補訂　二葉堂菁莪